
耳かき

佐和島ゆら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

耳かき

【Nコード】

N9394I

【作者名】

佐和島ゆら

【あらすじ】

妹の部屋に遊びに行った私は、人の話を聞いていないような態度の妹の静李しずりに疑問を持つ……姉妹物です。

そのことに気がついたのは、妹の静李しずりの家に泊まりに行った時だった。

何だか、人の話に上の空というか、正面を向いてしゃべっていてもワンテンポ静李からの言葉がおくれていた

「ねえ。それで今度、母さんのところに一度戻ろうと思っているんだけど。何か持っていくものある？ あるならもっていくけど……」服の整理をしていた静李は、頭を上げてきょとんと目を丸くして私を見た。

「え？ 何か言った？」

何度目なんだよとさすがにクルものがあつて、私は声を尖らして言った。

「えつとねえ。静李。君、その言葉今日私に何度言ったと思う？」私の様子に何か感じてくれたのだろつ、視線が私の体から少しはずれた所へ向いた。

それから時代劇の商人がお奉行様に、機嫌を伺っているみたいなくらい、両手をすり合わせ、下手に出た態度に出た。

「お、お姉ちゃん。声、コワイデスヨ。ええと、私何かした？」

「いやあしてないよ。ただ、何度人の言葉を聞いてないというか、上の空というか。新手の喧嘩を売る態度なのかなあつて思ったただだよ」

静李は長い髪をかきあげた。

「そんなことないつて。ちゃんと聞いてるよ、うん」

「二時間で六回も、え？ 何て言ったの？ って聞き返されたら、静李はどう思う」

「……むかつきます。はい」

私はため息をつくと言った。

「分かればいいよ。まあ他の人の前でしち駄目だからね」

静李は曖昧に頷きながら、そうだねと呟きにしか聞こえない小さい声で言った。

まじめなんだけど、微妙に態度や行動が甘いというか、これぐらい大丈夫でしょと思う癖があるんだよね。直球で言えば、怠惰なんだけど。けれど言つて、静李が感情的になつたら大変だ。怒気とか、喧嘩の強さは私をはるかに越えているから。

「お風呂貸して。入ってくる」

「あ、タオル貸すね。それからシャンプーは」静李は細々とした説明をしてくれた。

結構私自身すっかり癖があつて、服を脱いでからうろうろしてしまふからだろう

助かるけど、まるで保護者と私は思った。

だからこそうまく私たち姉妹は、やっていけたのだろう。上下関係がよく反転しあうから。関係のガス抜きができる。

だけど……

「ごめん、あの件で私思つたの。あの人は家族っていうか、もうどうでもいいっていう人というか。うん、ただの人だよ」

同時に静李のすがすがしいまでの笑顔を思い出す。あの子は傍目が普通だけれど、思索好きで変人扱いされる私以上に、無意識でそうとうゆがんだ方向へ思考がとんじゃってないだろうか。もしそうだとしたらかなりよくないが不安を覚えた、だけど同時にあの子の態度は一つ、私に教えてくれた。

家族だからこそ、無意識であれ、お互いの同意がなければ成立しないものはないだろう。血がつながろうが、戸籍が一緒であろうが、心がバラバラなら、そこにあるのはただの集団だ。その関係に温かな血のような、感情、信頼、そういう心の流れは、断絶してしまっているだろう……

親しきものにも礼儀ありとは、本当うまく家族のような関係においての大切なことを教えてくれる。そしてずっと昔から、教え伝わっ

たことを、人は知っていても当事者意識としてはなかなか認知できない。いやすっかり忘れている。だから、何度も泣かなきゃいけない……って、あれ？

私は浴室の戸を開けて、妹に呼びかけた。

「ごめん、洗顔料どこだっけ」

「しょうがないなあ。もう」

静李は呆れたような声を出して、浴室に来てくれた。

風呂から上がり、タオルで頭をふきながら私は言った。

「静李。綿棒をもらえる？ ちょっと使いたいんだけど」

「あ……ごめん。ないんだよね、きれちゃっていて」

「マジで……まあタオルでふけばいいんだけど」耳穴の奥まで入り込んでいる水滴をちゃんとぬぐいたいと思ってしまっ自分が出た。そうじゃないと耳垢がたまりやすくなるのでは。

「……」

静李は首を傾げた。

「姉ちゃん、どうしたの。だまりこんで」

「静李……綿棒はいつからないの？」

「一月ぐらいたつかもしれない」

「ふうん。静李、髪の毛長くなったね。肩に髪がかかって」

「うん。そだね」

私は話を切り出した。

「静李。最近いつ、耳かきした？」

「え？ 何で急に」

私はほとんど自分の頬を指で押しながら、天井に目を向けた。

「いや、昔小説で話を聞いてないと思ってた奴の耳の中が、耳垢だらけというシーンを読んだことがあってね。綿棒がないし、かといつてこの部屋、耳かきも見あたらない。そして長くなった髪。いろいろ、耳に流れこみやすくなってるんじゃないかなあって」

「そ、ソナキタナイコトナイデスヨ」

私は静李に視線を向けた。

「何？ その一本調子な声は」

「……ごめんなさい」

頭を軽く下げる静李。

もうほとんど自供しているのと同然な態度の静李に、私は言った。

「ちよつと買物してくる」

ぼつりと静李は言った。

「姉ちゃんって柔らかいよね。本当気持ちいいや」

「静李は固いよね。本当引き締まってる。まあ、そんだけ体を動かすのが好きな結果なんだろうけど」

「……似たようなこと、サークルの後輩に言われたよ」

静李はちらりと私に目を向けてから、ため息混じりに言った。あー、鬼門かと思いつながら私は軽く静李の肩をたたいた。

「静李も大変だね。後輩がデリカシーないとは。でも私はうらやましいよ、静李の体。私は細くなっても、筋肉がつかない」

「私からしたらそつちがうらやましい。そういえば前、二の腕に触ったとき、ぷにぷにして柔らかかった」

人を気にしていることを平然と言い合える仲とはいえ。本気で気にしていることを言われると、ちよつと心が揺れた。私は言った。

「で、でも以前より細くなっていたでしょう？」

「うん、細くなったよ」

「あ、耳垢発見。静李、ちよつとだまって」

中に落とさないよう慎重に耳垢を綿棒でこすりつけてとり、耳の外へと引き上げる。

ほうと私は一息ついた。

私が正座して静李は太股に頭を預けて、耳かきをしているのだが、いざ発見してとるにはなかなか緊張した。痛めたくないと思うと、逆に綿棒の動きに迷いがでて、なかなか大変だ……もうしばらくはやりたくない。

元々、静李に綿棒を買ってきて、さあやれと言ったのだが、当人ではどうもあると分かってもどこあたりなのか分からない耳垢があつて。それを的確にとるために私が静李の代わりに探すことになったのだ。

私は言った。

「よし。できたよ。静李、起きて」

「……」

「静李？」

「……」

静李は寝ていた。静かな息をたてて。

「ちよつと」

頭は結構重くてずっしり膝にくる。

眠って筋肉が弛緩している状態と考えれば、尚更膝に負担がきているだろう。

こいつは、耳のないロボットがいる家の子供ですか……と言いたくなつたが、言ったら何だか、負けというか、応答もないだろうから空しいというか。私は一度あけた口をきつく閉じた。ま、まああれだ。

このままだと、確実に足がしびれることは確定的だろう。……それはちよつと、いやちよつとどころではない大問題。

「……」

しばらく逡巡して、私は深呼吸をした。

「よし」とつぶやき、妹の寝顔を見る。

久しぶりに布団に寝かせつけよう、こんな大きくなってしまった（十八歳）女の子を。

幸い、すでに静李は布団を敷いているし。

私はそつと静李の頭を手のひらで支え畳の上に移動すると、布団をめくる。

本当はたたき起こして、風呂に入れと言いたくなるけど、静李は寝

起きはよくない。

かんしゃく起こして、私がストレスたまるって展開は精神衛生上よくないし。妥協するしかないな。

「静李、静李」

肩を強くゆらし、ぽんぽん背中をたたいて、静李を起こす。

静李は虚ろな目で私を見ると、すぐに下を向こうとしたので、私は強めの口調で言った。

「布団、毛布掛けてあげるから」

「……」

うなだれたのか、頷いたのか。判断がつかない態度をとり、静李はゆっくりと立ち上がると、布団に横たわった。私は毛布や布団をかけてから言った。

「私。ちよつと本を読んでいるから、寝るから。ちよつとまぶしいよ」

「うん……うん」

静李はまた静かな吐息をたてて眠りだした。

私は苦笑しながら、それを見つめた。

二時間後。

深い眠気に襲われながらも、妹の布団の隣に自分用の寢床を用意した。

窓にかけられたカーテンの隙間からは、月がちらりと見えた。妙にまぶしい気がする。そういえば中秋の名月が一昨日あったから、まだ月は輝いているのだろうか。

そういえば、あの人は明るい廊下から少し戸を開けて、眠っている私と静李を見ていたそうだ。そして母さんと私と静李の見分けがつかないくらい似ていると話していたそうだ。

「なんか本当幸せそうだよ、二人とも。どんな夢を見ているかな」
くすくすと笑っていたあの人。

そんなあの人をよそに私と静李は、双子じゃないのにね、不思議だ

ねと無邪気にしゃべっていた。

「おしめを変えたり、散歩につれていたり、可愛がっていたのね」

この間母さんと久しぶりにあって。あの人の話題になった時、母さんはぽつり言った。

私は妹の寝顔を見た。

静李は夢をみないそうだが、ぐっすりと深く深く体を休めている。

私には昔と変わらず幸せそうな寝顔に見えた。

「私は私の生活があるの。昔、学生時代確かに世話になった、助けもらった。でも今更返せないよ、ずいぶん昔だしね。だいたいどうにもできなかったの、本当に。そんな多額のお金は、引越ししなきゃいけないし、出せないに決まっているでしょう」

静李は学費が払えなくなった際にそう言われたそうだ。私たちは他にあてがないのに。私たちが困った時助けるのは、姉に多大なお金を出した父さんの遺言なのに。

「……私まで熱くなつてどうする」

私は軽く頭を横にふって、眠りについた。

かわらないもの、かわるもの。

家族のかたち、心。

「静李、ことり姉ちゃんも大変なんだよ。理不尽なこと、会社の同僚さんにいっぱい言われているみたいだから。元々、そんな心の余裕のある人間ではないしね」

言い訳にすぎないとわかつている。

この言葉、眠って聞いていない妹に無意味な言い繕いをして、同時に私へ言い繕っている。

自分は大変、かわいそう、そして頑張る自分はすごいという感情に満ち満ちた姉の言葉に、私は、間違いなく疲れている。だけど、偽善かもしれないけれど。

「いつかは皆で……」

そこで意識が途切れた。

翌朝。

「姉ちゃん、寝相ひどすぎ。お腹蹴られたよ!」

静李のそんな抗議の声でたたき起こされる

まで、私は深く深く眠りの底に落ちて、夢を見た。

姉に耳かきされる幼い私。

次は私と騒ぎ立てる静李。

母さんがこたつに入りながらリングの皮を包丁で剥いて、父さんは食べながら、笑顔でしゃべっていた。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9394i/>

耳かき

2010年10月11日04時35分発行